

「劇場におけるアウトリーチ～ダンス・プログラムの可能性～」

講演

「学校教育におけるダンスの歴史的変遷と教育的価値」

高橋 和子

(横浜国立大学教授・舞踊教育学)

私は、大学でダンス指導をしながら4年間附属小学校長を兼務し、指導要領にも関わり、一方では、からだ気づき教育研究会の中で色々なワークショップをしてまいりました。今日は4本の柱でお話ししますが、その前にこのゲーグルの商業映像をご覧ください。学校で指導するダンスとは、この映像のようにリズムダンスが市民権を得ているダンスなのかと思いますし、逆にこういった情報が流れますと小学校でヒップホップが必修だと思われるかもしれませんが、従前と同様、創作系、リズム系、フォークダンスが内容になっています。また様々な団体がダンス指導のライセンスを取得させるためのワークショップを実施しています。ご存じのように小学校や中学校の先生は教員免許状を持っているので、ダンスや武道の授業もできるわけで、ダンスライセンスを必要とはしません。また文科省では必修化をうけて『ダンスリーフレット』『実技指導資料』等の資料も作っています。こんな背景を先にお話しします。

【1番目の柱：ダンスの歴史的変遷】

明治中期以降現在に至るまで、ずっとダンスは体育の中で行われてきました。戦前と戦後で大きく分けてみますと、戦前はある程度既製の作品を踊ったりしていました。戦後になりアメリカの指導もありまして、ダンスや体育だけではなくて多くの教科が児童生徒を中心に授業をするという方向性となり、ダンスでは自己表現を引き出すような内容をずっと大切にされて行われてきています。この舞踊学会の役職に就かれた先生方も指導要領の改訂に関わられた方が多いです。1989年に男女共修となり男子生徒もダンスを学ぶこととなり、1998年にリズム系ダンスが加わり、2008年には中学校1・2年での必修化、2012年は完全実施という流れになっています。このように戦後の改訂の流れをくんだ必修化であり、ダンスの内容は大きく変わってはいません。

【2番目の柱：ダンスの教育的価値】

表現系ダンスは表現世界に没入して踊る喜びを核とし、リズム系ダンスは根源的な律動の喜びとリズムを核としています。この2つは定型のダンスを踊るのではなくて自由に即興的に踊るという

ことが大事にされています。一方、フォークダンスは伝承されてきた定型の踊りを追体験するということが大事にされています。3つのダンスは総じて心身の解放やコミュニケーションを重視しているので、指導法も子どもの動きやイメージを引き出していく問題解決学習をとることが多いのもダンスの特色と言われています。表現系に限り、指導要領で出されている文言を書き出してみますと、小学校低学年から高等学校へと移行するにつれ文言の量が増え、「変身する・即興的に動く」等から、だんだんまとまりをもった作品作りへとようになっていきましたが、根本的なものは、それほど変わらないと言えます。

【3番目の柱：私の実践事例】

1. 小学校の実践事例

ダンス初心の附属の男性教員の事例です。初めは私がそのクラスで流行っていた「けん玉の技」の世界一周や綱渡りを全身表現にしていきました。その体験をきっかけにして、子どもがもっとやりたいと言い始め、担任が子どもと悪戦苦闘しながら、初めて表現運動に取り組んだのです。形のある物のほうがやりやすいということで、図工とのコラボレーションが始まりました。抽象的な絵にも挑戦していくにつれ、だんだん自由に表現していくようになりました。そうすると、他のスポーツではなかなか見えてこない子どもの生活パターンや悩みも見えてきて、「子どもの心が透けて見える」とまで担任は言いました。これは名言です。

彼の4年間の実践を映像で紹介します。このシーンは「先生、表現やって！」と言われて初めて取り組んだ時の様子ですが、太鼓1つで音楽もなしでやっています。子どもの表情がどんどん豊かになっていきます。スポーツでは「できる・できない」がある意味あるわけですが、表現では何でもいいんだよというふうに思わせていく中で、子どもの心身が解放されていく姿が見られるようになりました。

次は、クラス替えて新たに表現に2年間取り組んだ最後の発表会の映像です。このシーンはダンス部員だった学生が教育実習時におこなった振りを楽しげに踊っている子どもの姿。次は劇団四季を見に行った子たちがこれにはまって練習して

いる姿。器械運動では技の出来栄を競っていたのが、最後のポーズを「花」のように表現的にグループ演技をしたシーンです。次は、理科で学んだ「磁石」の特徴である、くっついたり離れたりする動きを、男女40名が言葉も何もなく7分くらい即興で動いているものです。このように他教科や他領域から題材やイメージをもらってドッキングしていくクロスカリキュラムは、ダンスには適しています。これは、からだそのものが素材であるダンスの特徴とも言えます。

最後の映像は「キャッツ」を全員でやりたいという子たちの要望を受けて、劇団四季の人が無料で指導に来てくれ、本物に魅了された子たちの姿です。今回の学会テーマである「アウトリーチ」の本質である、本物に触れる素晴らしさは子どもの心を本当に動かすんだなと思いました。衣装も化粧も親が協力してくれました。女子が目立ちますが男子も自分の適材適所の場所でやっています。これらの活動は体育の時間だけではなく、総合的な学習の時間も使ったそうです。小学校ではこのようにカリキュラムを自由にできるところも魅力ですね。この子たちは今5年生になり、担任も附属から公立学校に戻っています。ダンスをやりたい子はお稽古場に通い始めたと聞いています。

2. 中学校のダンス実践事例

中学校はダンスが必修化して、指導者側の難しさとしては、「ダンス経験や指導経験もない、単元計画を立てられない、指導方法や評価も分からない」ということがあるようです。生徒に人気のリズム系を行う教師も多くいて、DVDを見せて振り移しの踊ることで良しとし、教師は何も教えない状況も見られるようです。こうした背景には、例えば大学でバスケットの実技を半期履修したら、それで中学校の保健体育の先生になれるという制度改革が影響しています。多くの教員がダンスや武道の経験がないまま、教育現場に出ていっているのです。教師の指導力育成のために、大学でも教員免許状更新講習や、県や文科省も色々なセミナーを開いていますが、教師の多忙化が講習を受けられない阻害要因としてあります。

そこで、私は、ダンス初心の男性教員13名にインタビューをして、指導の課題を知ろうとしました。「どんなコツが必要か」という質問では、「教師も恥ずかしいけど率先して踊る」「初めのうちにリズムや表現に没入する体験を与える」「とにかく褒める」「教師自身も試行錯誤しながらやらないと分からない」「たくさん教材を知らないと立ち往生する」「発表を焦らず子どもが発表したくなるまで待つことも大事」などが見られました。指導の課題については「一方的に教えるんじゃなくて、引き出すためのパラダイムシフトが必要」だったことが考えられます。また、グルーピングについても、中学校は思春期でとても男女を意識

する時期ですから、そこで無理して男女でグルーピングをしようとするとうまくいかない時もあるので、緩やかにソフトランディングすれば良い、無理して男女ペアを組むことはない、ということでした。

次に、特にリズム系の授業で外部講師をお願いする場合に起きている問題は、講師に丸投げして教師は何もしないということです。そうすると、子どものまなざしは格好よく踊れる外部講師に向かい、外部講師がいなくなった時には「えーっ先生かっこ悪い!」という事態を招きやすい。そのためよく連携をとって、学校側が何を目的にどのような内容を外部講師に頼むのかを明確にする必要があると、教員側の反省点にでています。

また、他のスポーツ教材とダンスは何が違うのかと質問したところ、次の項目が挙げられました。「不登校が減った・どの子も主役になれた・表現が豊かになった・自己肯定感が上がった・体育が嫌いな子にとっては好きになるきっかけになった・学級経営が非常に良くなった」等です。

また、私のように大学で教える人への問いもあります。「指導要領を教える必要があるのか・ミニマムエッセンシャルズはあるのか・ダンスモデル・コアカリキュラムは全国で統一してあるのか」等です。今のところ統一見解はありません。それは、それぞれの大学教員がどういう目的で授業を組み立ててしていくのかに負わされているからです。中学校でダンスが必修化されても大学がダンスを必修にしていなかった場合が数多くあります。そういった現状も背景にあることを知っておいていただけたらと思います。

【4番目の柱：学校と芸術家をどうつなぐか】

最後ですが、学校と芸術家をどうつなぐかについてです。これまでの色々な経験から、大学も指導要領をしっかりと教えて卒業させる、芸術家も指導要領を読んで教育現場に入っていく。指導要領も解説も関連資料も文科省のHPですぐに見られます。また、指導方法としては、ワークショップ型と言いますが、一方的な教え込みではなく、双方向の学び合いであるということです。

そして、学校文化を知らない芸術家も門前払いされないように、両者をつなぐ上で、教師側がコーディネイト役を果たす。このことは、今後一層、教師の職能としても位置付けられることになると思われます。学校に芸術家達が入ってきたら、彼らの面白い動きやイメージや、本当にあの辺から飛んでくるような発想を教員はもらって、教師自身が柔軟になる。アウトリーチがそんなチャンスになったらよいなと思います。教師側も学校という独特の枠から解放されることも必要かと思えます。なぜなら、未来に羽ばたく子どもたちを教える教員は、もっともっと自由でなければならぬからです。その力を劇場からもらうのです。